

区民と創る港区の男女平等参画のための情報誌



特集

社会を変える、声のあげ方

コミュニティオーガナイズングを使った私たちの取組
—性暴力をなくすための実践を例に—

VOL.
78

令和5年(2023年)
9月発行

リーブラで活動する団体紹介

男女平等学習団体

『ハンディ&シニア企画 桜の会』

リーブラからのお知らせ

第43回 男女平等参画フェスタ in リーブラ2023を開催

リーブラからのおすすめ図書

令和5年度・助成事業企画募集のご案内



特集 社会を変える、声のあげ方

コミュニティオーガナイズングを使った私たちの取組 —性暴力をなくすための実践を例に—

私たちが暮らす社会の「おかしい」ことを「仕方がない」と締めるのではなく、「仕方がある」と私たちの力で変えていくためにはどうしたらよいのでしょうか。市民の力で自分たちの社会を変えていくための方法であり、考え方である「コミュニティオーガナイズング」。日本でこの手法の普及・啓発を主たる活動にする NPO 法人コミュニティ・オーガナイズング・ジャパンの理事・共同創設者の鎌田 華乃子（かまた かのこ）さんに、市民の実践を紹介いただきました。

声をあげづらい日本社会

ジェンダー問題などに取り組む皆さんにとって、声をあげることが難しいと感じることは日常ではないでしょうか。私もジェンダー、性暴力分野で活動してきたので、ジェンダーによる差別がある、性暴力がある、という叩かれる、批判される、ということを経験して、辛い思いもしてきました。どこの国、社会でも感じる違和感を口にしたり、声をあげたりすると叩かれるというのはあると思います。ただ、その度合いが日本では大きいと感じますし、何より応援してくれる人、温かい目で見守ってくれる人が少ないと感じます。それが、日本での声のあげづらさにつながっているのかもしれません。

どうして日本では違和感を口にしにくいのか。私は米国ピッツバーグ大学社会学部で博士課程をしながら、なぜ日本人は社会運動に参加しないのか、どうしたら参加するのかということを中心に据えて研究しています。その中で「反抗議文化」というものが日本にあると思うようになってきました。「反抗議文化」とは社会や政治に異議を申し立てる人、デモをする人に対して、反感・嫌悪・倦厭を感じる文化、と私は定義しています。抗議というと、学校などに対する保護者からの抗議や、顧客からサービス提供者の企業などへの抗議もありますが、それについては日本では正当なこととして位置付けられていると感じます。それは顧客第一主義ということで、サービスを提供する人に顧客として苦情を申し立てることは権利だとみられているからかもしれません。

一方、政治や社会問題については、どうでしょうか？日本では政治というのは一般の人が関わるものではない

という考えが強くあると思います。芸能人やスポーツ選手が政治や社会問題について発言すると叩かれます。しかし、政治は私たちの生活を規定するものです。赤信号なら道路を渡らない、というのは法律で決まっています、みんなで守っているから社会が回ります。政治で私たちの生活のあり方を決めるなら、そこに対して意見をもち、意見を言うのは当たり前のことなのに（顧客としてサービス提供者に苦情を言うのが当たり前のように）、なぜ政治や社会問題について意見を言うと叩かれるのでしょうか。それは、政治は政治家がするもの、一般の人が口出しするものではないもの、というイメージがいつからか出来てしまったからかもしれません。1960年の安保条約をめぐる社会運動の後、日本では自分を「ノンポリです」という人が増えたと言われています。世界価値観調査という40年に渡って世界中の人々の価値観を調査したデータでも、日本の人たちの政治への関心度はそこまで低くないのに、友達と政治について話す頻繁に話すという人の比率は最下位レベルです。これを変えていくためには政治について話すことを日本で当たり前にする、という文化変容が必要なのかもしれません。

とはいえ、文化が変わるのを待っていたら、何も変化は起こせません。反抗議文化がある中で、どうやって声をあげ、変えていけるか、ということを考える必要があると思います。そこで私が紹介したいのがコミュニティオーガナイズング（CO）というものです。COとは「スイミー」。レオ・レオニ作の子ども向けの絵本を教科書やどこかで目にされた方も多いと思いますが、大きな魚に追われて逃げまどっていた小魚たちが、スイミーに励まされ一緒に大きな魚のように泳げるようになることで、大きな魚を追い払う、というストーリー。こ

れが、まさにCOです。1人ではとても怖くて立ち上がれない、叩かれるかもしれないけれど仲間がいたら立ち上がるのではないのでしょうか。COは同じ想いを持つ仲間を見つけ、チームを作り、その輪を広げながら、戦略をもってアクションをして社会変化を実現していくものです。私の自己紹介も兼ねて、COとは何かをお話します。

コミュニティオーガナイズングとは？

私は幼い頃から母が病気がちで毎日不安を抱えながら過ごしていました。やすらぎを与えてくれたのが近所の公園にあった木で、毎日登りに行っていました。ただ私が小2の時に公園が整備され大好きな木も切られてしまったのです。それをきっかけに環境問題に関心を持ちました。将来は環境を守る仕事に就きたい、と環境コンサルタントの会社に26歳のときに転職。しかし、組織のためを思ってであっても自分の本当の意見が言えない、行動を起こしても叩かれるというジレンマに陥っていました。同様に、他の企業でも、官庁でも、友達同士でも、政治の場でも同じ様な事を言っている人達が沢山いました。「本当に言いたい事は言えないし、行動できない」と。そのような中で仕事で調べた海外のNGOや社会運動をみると、社会や生活を良くするために声をあげることは良いことだという想いが根底にあることに気づきました。日本を、想いをもち行動する人を応援できる社会にしたい。私は11年間続けた会社員生活を離れ、公共政策大学院ハーバード・ケネディスクールに留学しました。

そこで市民の力で社会を変える方法を模索し出会ったのがCOでした。COを教えるマーシャル・ガンツ先生が「一人ひとりの力は小さい。でも多くの人が力を出しかうことで、大きな変化は起こせる」と言った時、「私は1人で何かしようとしていたのだ」と気がつきました。どんなに想いがある人でも1人で社会は変えられないのです。

私自身、凄く知識があるのでもなくカリスマリーダーでもなかったのも、リーダーにはなれないと思っていました。しかしリーダーシップとは地位でもなく人の性格

でもなく、他の人がリーダーになれるように育て、人々が共有する目標に向かって進むのを支える事だと聞いた時、目から鱗が落ちる思いでした。また完璧でなくて、誰かに頼っていい。そしてリーダーシップは学べるものだと分かりました。これは5つのリーダーシップの実践にまとめられます。①ストーリーを語る事、②関係構築、③組織構築、④戦略、⑤アクション、そしてコーチングを常に活用します。これら5つは、皆さん自然に普段からやっていることです。それを何度も実践して、失敗から学びながら効果的にやっていくことを目指します。求める変化の実現に成功している社会運動を分析すると、この5つのことをしっかりやっています。ここで私が関わったCOの事例を紹介します。

2023年6月に実現した市民による性犯罪の刑法改正

日本では性犯罪を取り締まる刑法が明治以来変わっていませんでした。2017年に一度大幅に改正されましたが、不十分な改正でした。そして今年6月16日に二度目の大きな改正が実現し、かつ罪名も「不同意性交等罪」に変わったのです。それまで被害者を守るものになっておらず、激しく抵抗しないと性犯罪とみられない状態だったものが、「同意しない意思」を形成・表明する、全うすることが困難な状態にして性交などを行った場合に処罰されることになりました。怖くて声をあげられなかった、力関係で上の人にいやと言えなかった、など性被害の現場でよくあることが、これまでは被害者の抵抗が足りないとされていたものを、相手の気持ち、意思を尊重しましょう、という法律になったのです。これは、本当に多くの被害者、支援者、アライの方達がそれぞれの場、やり方で声をあげ、その方向が一つに向かって作用したからに他なりません。

私は2017年の改正実現から関わっていました。2014年頃から刑法改正の議論はあったのですが、残念ながら大きくは変わらない。そんな現状を私はたまたま参加したイベントで知り、ちゃぶ台返し女子アクションというジェンダー分野でコミュニティオーガナイズング(CO)を実践する団体と一緒に活動していた仲間たちに「これ、おかしくない？」と伝えたのが始まりです。1団体では法律を変える大きなキャンペーンは無理

だと考え、性暴力を専門に扱う「NPO法人しあわせなみだ」、「刑法と性暴力を考える当事者の会」、アーティスト集団の「明日少女隊」の4団体で2016年9月に共同で「ビリーブキャンペーン」を立ち上げました。活動開始から9ヶ月後に性犯罪の刑法において110年ぶりの大改正が実現。しかも、更に変える必要があるという私たちの声が反映され、3年後にさらに見直しするという規定もついたので。

成功した要因はインサイダー戦略とアウトサイダー戦略を両方しっかりやれたことだと思います。インサイダー戦略とは意思決定の内部構造に働き掛けること。私たちは45人の刑法改正を担当する国会議員に超党派で会いにいきました。国会なんてなにも知らない、ロビイングもやったことない。そこで役立ったのはCOで活用するストーリーを語ること、価値観を共有し関係構築をする対話の方法です。当事者たちが語るストーリーに動かされ、多くの議員達はこのままではいけないと動いてくれました。そしてCOの戦略に欠かせないのは誰が意思決定する権限を持っているか把握することで、これも国会議員の中で誰と特に関係を作るべきか考える視点になりました。アウトサイダー戦略とは外側から意思決定者にプレッシャーを掛けるもので、デモはその最たる例です。ただ、性暴力について公に声をあげることは当時世界的な#metooムーブメントの前でもあり、大変困難でした。そこで性行為において相手の意思を尊重することを考える「同意ワークショップ」を開発し、特に大学生とキャンパスでワークショップをして性暴力を防ぐ活動をしたところ、その活動が注目されメディアに取り上げられ、またその大学生たちがロビイングにも参加する、という循環が生まれました。国会議員の多くが私たちの動きに注目してくれていました。



大学生と共に実施した「同意ワークショップ」の様子

不同意性交等罪の実現へ

そして2017年の改正で規定された3年後の見直しを実現させようと、「刑法と性暴力を考える当事者の会」の代表をしていた山本潤さんたちと性被害当事者によるアドボカシー団体、一般社団法人Springを立ち上げました。私は立ち上げをしてすぐに留学に出てしまい理事として側面からSpringの活動を支援していました。Springは地道に国会に通い、ビリーブキャンペーンで培った国会議員や関係省庁の関係性をさらに積み上げ、超党派で刑法改正に関心を持ってもらい、引き続き働きかけをしてもらえるようロビイング活動を続けました。また一団体ではなく刑法改正に関心のある団体と動けるように、団体間で相談し連合体「刑法改正市民プロジェクト」を立ち上げたのです。それに加え調査研究として「性被害の実態調査アンケート」を実施し、6,000人近くが参加してくれました。結果では、性被害の多くは知り合いが加害者であり、暴力を伴わない形で性被害がおき、自分に起きたことを被害と認識するまでに多くの年数を要することが明らかになりました。この結果によって見直し改正が必要だという根拠を示すことができました。

一方ロビイングだけで、多くの国会議員や関係省庁職員のやる気を引き出すことは難しく、もどかしさも感じていたところ、性暴力に反対する「フラワーデモ(FD)」が始まったのです。2019年3月に4件連続しておきた無罪事件をうけ、怒り、絶望を感じた人たちが、北原みのりさんたちの呼びかけに応じて東京駅に4月11日に集まったのが始まりです。

400人以上の方が集まり、その反響を受けて1年間続けていこうと決めたところ、翌月から福岡、大阪、名古屋など主要都市で地元の方々がFDを自主的に開催することを決め、その輪は広がり1年後には全都道府県でFDが開催されることになりました。FDの場では、今まで誰にも被害を打ち明けていなかった方が自分の被害を話したり、話を真剣に聞き合ったりという今までになかった場が生まれていました。日本では無いものとされていた性暴力が日本全国で可視化された場となり、開始当初は大手メディアの報道は少なかったものの、徐々に多くの報道がされました。それを受けて国会議員の発言も積極的なものになってきたとSpringでロビイン

グしているメンバーも感じていました。OneVoiceキャンペーンという、性暴力へのNOのメッセージを書いた紙を持って写真で示す取組も広がり、ボランティアメンバーの力で1枚1枚集めて、多くの当事者、市民の声が可視化されるとともに、ロビイングで訪問した国会議員もOneVoiceキャンペーンに協力してくれました。そして被害当事者が刑法改正の検討会、審議会のメンバーに選ばれたのです。今まで専門家で固められていた中で、被害者の声を直接法律の検討する人たちに届けられる形になったのは非常に大きいことでした。FD以外にもSpring他2団体が立ち上げたオンライン署名に13万人の方が協力をしてくれたり、性的同意の大切さを大学生や高校生に伝えたりする団体が多数いました。国会に通っていたSpringメンバーは「不同意性交」にするには10年はかかると思っていたそうで、その「不同意性交」に変えることができたのは、署名、デモ、調査など様々な形で声をあげ、応援してくれた人たちがいたからに他なりません。そして、その力をしっかりと受け止め、国会や政策を決める中枢にいる人たちに届ける役割をしたSpring等の団体がいたからです。



6年に渡り地道なロビイングをしたSpringメンバー

おわりに

社会を変える活動は大変エネルギーが入ります。それでも、法律を変えることができたなら社会の形を変え、多くの人を救える、人生を良い方向に変えることにつながります。そして法律を変えるプロセスに参加する人が沢山いることで、その人たちの意識が変わり、社会規範や社会の形も変わっていきます。社会変化は1人では決して起こせません。他者としてしっかりと関係性を作って、共に戦う仲間と強いチームや組織を作り、意思決定

権限を持つ人やその力関係を見定めて、効果的な戦略を展開することで、変化は起こせます。そのヒントとなるCOをぜひみなさんにも学んでいただきたいと思います。拙著ですが「マンガでわかるコミュニティ・オーガナイズ：ヨノナカを変える5つのステップ」（大月書店）を手にとってもらえればと思います。NPO法人コミュニティ・オーガナイズ・ジャパン (<https://communityorganizing.jp/>) では定期的に誰でも参加できるワークショップも開催しています。読むよりも実践が一番学べますので、ワークショップにもぜひ参加してみてください。

現代社会は生きづらさや困難が多くあり、日本ではその生きづらさに声をあげるのも大変、あげても白い目で見られる、と大変な環境ではあります。私もとても1人では声をあげられませんか、また自分1人の力で変えられるとも思えません。でも仲間を見つけ、その仲間と共に戦略をもって行動し、繋がりを広げていくことで確実に法律や社会の規範や意識が変わっていきます。私たちが社会の文化、規範、法を作っているのですから、私たちの力で変えられます。「仕方がある！」共に歩んでいきましょう。

執筆者プロフィール

か ま た か の こ
鎌田 華乃子 さん

NPO法人コミュニティ・オーガナイズ・ジャパン 理事/共同創設者

神奈川県横浜市生まれ。子どもの頃から社会・環境問題に関心があったが、11年間の会社員生活の中で人々の生活を良くするためには市民社会が重要であることを痛感しハーバード大学ケネディスクールに留学しMaster in Public Administration(行政学修士)のプログラムを修了。卒業後ニューヨークにあるコミュニティオーガナイズ(CO)を実践する地域組織にて市民参加のさまざまな形を現場で学んだ後、2013年9月に帰国。NPO法人コミュニティ・オーガナイズ・ジャパン(COJ)を2014年1月に仲間達と立ち上げ、ワークショップやコーチングを通じて、COの実践を広める活動を全国で行っている。ジェンダー・性暴力防止の運動にも携わる。現在ピッツバーグ大学社会学部博士課程にて社会運動に人々がなぜ参加しないのか、何が参加を促すのかに関する研究を行っている。



リーブラで活動する団体紹介

男女平等学習団体

『ハンディ&シニア企画 桜の会』

リーブラで活動を行っている「男女平等推進団体」「男女平等学習団体」のみなさんをご紹介します。

●団体の活動～考えて、作って、使って～

1994年の婦人会館時代に行ったケニア大使館関係者の方のための着物リメイクドレス制作、ファッションショーを観て、港区で『ハンディ&シニア企画桜の会』は発足しました。そのころ、すでに自分でも障がい者や高齢者が着やすい洋服づくりの研究に取り組んでいました。



型紙を布に写し、パンツの製作中

普段の活動では、服や小物など様々なものを作っています。作品ができていくって、楽しいんです。考えて作って、褒められて、それが喜びになっていくから。そして、また作ろうかなって、楽しさがどんどんつながってっていきます。

●布による社会貢献

30年ほど前、印象に残ることがありました。他区ですが、放課後に自由に参加できる子どもの手作り会を開いていました。楽しそうに参加していた子が作品をもって帰ったら、母親から「針なんてとんでもない。使ってはダメ。そこへ行ってはいけない。」と言われたそうで、その子は入口で眺めているだけになりました。危険なのか、子どもに相應しいのか、母親が実際に見ることなくイメージで判断し、子どもの好奇心や可能性を否定してしまうことがショックでした。

「障がいのある方も着やすい服」の依頼があるときには、製作者が家まで行って希望を聞きます。障がいのある方は、介助者がいないと外出が難しいから。同様に何が不自由かを外に表現する機会がないと思い、団体で研究している「障がい者も着やすい服」を「ファッションショー」という形で発表しています。ショーを通して、何に困っているか、どのようにすると解決できるのかということを、地域の方に伝えたいと思っています。

車いすの介助者の方にも、着物リメイクの服を着ていただいたら、とても元気な様子になりました。おしゃれだけでなく、「似たような着物でお母さんと一緒に祭りに行ったな」など昔のことを思い出して若返っていくということを知りました。ご本人たちの必要性を実際に見て、感じて、今まで活動してきました。

●手芸・裁縫を「コミュニケーションの場」として

団体の活動は28年行っていますが、25年間参加している人がいます。作ることを通して、集うことが大切だと感じています。「ここに行こう」と目的があると、様々なことの意欲

「麻」「大島紬」といった着物の布地、カラフルな子ども用の浴衣から、夏物パンツ、帽子、バッグチャームなどへとどんどん形を変えていく。リーブラでは11月、女性に対する暴力根絶のシンボルであるパープルリボンにちなんだ紫の作品とメッセージを展示し、女性に対する暴力をなくす運動を団体と共に取り組んでいます。毎回、作品を提供していただき、手芸を通して様々な活動をしている『ハンディ&シニア企画桜の会』の方にお話を伺いました。



になります。永く活動していると、家族や自分が病気になる、介護をするなど、女性だけの問題ではないのに、まだまだ平等でない出来事がある。そんなとき「みんなで頑張っていこうね」と話せる場にもなっていると思います。手芸を通して、ここに集まることが何か癒しになっていたら幸いです。そのためにも、作りたいものの希望を聞き、見本を作ったり、材料をそろえたりする努力はしているつもりです。「布はないけれど、これを作りたい!」と言ってもらって、その人が思っていることやできることを大切に、「こんな方法ならできるかも」と提案しています。



ミシンでどんどん縫い進めていました

あるとき、ネクタイを使った小物づくりを企画したことがあり、男性の参加もありました。どのような企画にすれば、男性も参加するだろうか考えています。なぜなら、団体のことや活動のことを多くの方に知ってほしい、分かってほしいと思っているからです。

シニア世代の男性の中にはパートナーや家族に対して横柄な態度の方もいます。例えば、「食わせてやった」「遣いに出した」のような。しかし、そんな言われ方されたら嫌ですよね。そこで、「違うでしょう」「こう言った方が良いのではないですか」とお伝えしています。「手芸」を通して、今なおある固定的な性別役割分担意識の問題を共有し、解決に向け、「このような活動をしていることが大事なこと」だと認めてくれる人と団体を通して出会い、発信していきたいと思っています。

●日々見つけられる「できること」へ

仕事や団体の活動は布地の手作りですが、私の関心があるのは人間の暮らし、男女平等についてです。布による消費者運動、環境問題、障がい者の支援というように、自分にできることをつなげてきました。それが楽しいんです。頼まれて取り組むのは嫌ですよね。でも、「自分が考えて人が喜んでくれるかな」「これだったらどうか」と思ってやっていることは全然苦にならないんですよ。

日々いろいろと感じたことから、自分のできることをして、メンバーに提案し話し合い、試行錯誤しながらも団体の活動に取り入れていきたいと思っています。

お話をうかがった方

ハンディ&シニア企画
桜の会

菊池 裕子 さん



第43回 男女平等参画フェスタ in リーブラ2023を開催

港区立男女平等参画センター(リーブラ)は1980年に開設され、今年43年目を迎えました。年に1回開催する男女平等参画フェスタは、登録団体が構成される実行委員会が中心となり話し合いを重ね、活動内容の発表等を通して、男女平等参画について楽しく学ぶ場を作っています。

今年は「私」がひらく現在・未来」をテーマに、6月23日(金)の東ちづるさんの講演を前夜祭としてスタートして、6月24日(土)、25日(日)の3日間で、1,557人の方にご来場いただきました。

大盛況だったフェスタの様子を、実行委員長の南さんよりご報告いただきました。

俳優の東ちづるさんに「誰も排除しない『まぜこぜの社会』をめざして」と題して、講演をしていただきました。ジェンダー・セクシュアリティや年代、障害・病気、国籍など様々な人々が当たり前で存在することや誰もが自分の思う幸せを生きられることを目指した30年間のボランティア活動について、たくさんの映像を交えながらお話しいただきました。

開会式では港区長 武井雅昭氏から参加団体を労うご挨拶をいただきました。その後、区長は参加者に声をかけながら、各参加団体ブースを見て回られました。



開会式でお話される武井区長

リーブラで活動する団体の参加は、展示・料理チーム19団体、ステージチーム21団体、お子さん向け企画・パネル展示チーム3団体、講座企画チーム4団体、広報チーム2団体でした。また、13団体に当日の運営をお手伝いいただきました。



「どんぐり」展示の様子



「トロピカルファミリーダンス」ステージ参加者と一緒に踊る様子

ステージチームでは、どの団体も日ごろの活動成果を十分に発揮し、観客にも好評でした。団体同士で見合う機会があることで、互いに良い刺激になったと思います。

展示・料理チームでは、手芸、組紐、リメイク、書道などの団体、また男女平等視点で活動に取り組まれる団体が、日ごろの成果物を展示・販売したり、活動成果を発表したりしました。また、手作り水餃子の提供や茶道のレクチャー・席入があり、お腹も満たされる楽しいスペースになりました。

お子さん向け企画・パネル展示チームでは、団体の活動を紹介する展示をしたり、お子さんが参加できる内容にしたりして、参加した人たちも見るとも楽しませるものになりました。

講座企画チームでは、団体ごとに講座を企画から始め、運営しました。参加団体が日ごろから感じている男女平等社会のための視点で講座を作り、それぞれ有意義な講座になりました。



「石川流茶道延の会」茶道体験



「ママティブ」お子さん向け企画

「私」がひらく現在・未来」をテーマとした「第43回 男女平等参画フェスタ in リーブラ2023」は、昨年より多くの来場者を迎えて盛大に開催されました。今回のフェスタは、日程を3日間に増やし、前夜祭に主講演、運営方法はチーム制という新しい体制で取り組みました。各チーム、リーダーを中心に団体同士が関わり合えるようにしました。

フェスタ実行委員会では、フェスタの来場者に、一緒に男女平等参画社会を考えてもらう機会にしようと、リーブラで活動している団体の理念をどうやって伝えるかを話し合い、団体の目的・活動を通じて、なりたい姿を団体ごとに表示・表現してもらうこととしました。当日は、どの団体の表示にも目的と未来に向けた方向性がしっかりと示されており、表示が難しいステージチームでは、表現内容に盛り込むなどの工夫があって、フェスタの一体性を感じることが出来ました。

来場者に会場を見て回った感想を聞いてみたところ、「子どもと一緒に楽しめるものがいっぱいあってよかった。私にもできることがあるかもしれない。活動に参加してみたい。リーブラの催しものに参加したい。」という声を多く聞くことが出来ました。

今後は、講演の「誰も排除しないまぜこぜの社会をめざして」にもあるように、さまざまな環境にある人や世代の異なる人たちが、より広く参加できるように工夫していきたいと思います。実行委員の皆様お疲れ様でした。



閉会式での記念撮影

報告 **南 かほる** (第43回 男女平等参画フェスタ in リーブラ 2023 実行委員長 / NPO法人男女平等参画推進みなと 副理事長)

おすすめ図書

『コミュニティ・オーガナイズング
—ほしい未来をみんなで創る
5つのステップ』

鎌田華乃子[著] (英治出版)

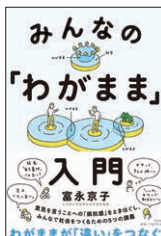


本書では、コミュニティの中での社会の変化を促進する方法について、地域社会や組織内での問題解決に役立つ「コミュニティ・オーガナイズング」を紹介しています。集まった人たちの力を結集し、共通の目標を設定することから始め、対話を重ねながら参加者の声を反映させること、問題解決に向けた具体的な行動計画を立てること、そして成果を評価し、次のステップに向けて改善するという5つのステップを事例と共にわかりやすく解説しています。

コミュニティ内でのリーダーシップの育成や、問題解決に取り組むための手法について理解を深めたい人や、地域社会に関わる人々にとって有益な一冊です。

『みんなの「わがまま」入門』

富永京子[著] (左右社)



自己責任や個人主義の考え方が強くなっている今の社会において、個人が自分の意見を表明することが「わがまま」とされる雰囲気があります。働くこと、子育て、ジェンダーギャップなどに対する意見は、「おかしいからよくなってほしい」など個人の幸福を追求する行動であるとともに、表明することでその問題に関心を持つ人が増え、社会に対する意見が変わる場合もあります。

本書では、自分自身を大切にすることや「わがまま」を社会へつなげていくことが多様な人々と社会をつくるために必要だと述べています。また、上手に伝えていくための方法についてワークショップを交えながら紹介しています。今の社会を少しでも変えたいと思う人々にとって、新たな視点を提供する一冊です。

お知らせ

令和5年度・助成事業
企画募集のご案内

私たちの暮らす地域、社会には、改善や解決していきたいと感じる悩みや課題があります。リーブラでは、「全ての人が性別等に
とらわれず、自分らしく豊かに生きる」ことのできる社会づくりのための企画に助成金を交付し、活動の支援を行っています。皆
さんの思いや、アイデアを形にするチャンスとなるこの事業を活用して、男女平等参画の活動をおこなってみませんか。

※詳しくはリーブラ公式ホームページに掲載されている募集要項をご確認ください。

●対象となる主なテーマ

- ・性別、性的指向及び性自認による差別の解消
- ・女性活躍推進・働き方改革
- ・男性にとっての男女平等参画推進
- ・ワーク・ライフ・バランスの理解促進や多様な働き方を選択できる社会づくり
- ・男女平等参画の視点による地域のネットワークづくりや住みやすいまちづくり
- ・配偶者等からの暴力（ドメスティック・バイオレンス）の防止
- ・港区内の男女平等参画の調査、研究、分析 など

●説明会

- ・申し込みを検討される方はいずれかの説明会にご参加ください。

第1回：9月24日（日）午後2時～4時（学習室C） 第2回：10月1日（日）午後2時～4時（オンライン“ZOOM”）

●申請期間：2023年10月16日（月）～11月13日（月）

●申請場所：港区立男女平等参画センター（リーブラ）に郵送またはメール（info@minatolibra.jp）にて提出

※申請を検討される方は、必ずリーブラの窓口か、リーブラのホームページからのデータダウンロードなどにより、全ての書類をご確認ください。

●助成事業の3タイプ

タイプ	ホップ	ステップ	ジャンプ
対象	団体を設立したばかりの方、 助成金を使った事業を始めたいと考えている 団体の方	比較的活動実績があり、より自立した運営を目指 している個人・団体 ※団体規模の拡大、活動の活性化、知名度の向上など を目指す方に適した事業	連続講座やより大きなイベントの開催を考えてい る個人や団体 ※男女平等参画に関する調査・研究などを行う研究機関 や大学などにも適した事業
助成金額（税込・最大）	100,000円	70,000円	300,000円
支払時期	企画実施後	企画実施後	企画実施前
助成対象	団体のみ	個人または団体	個人または団体



港区立男女平等参画センター リーブラ

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦

Tel:03-3456-4149 Fax:03-3456-1254

▶<https://www.minatolibra.jp/>

@libraminato

アクセス

- JR「田町駅」東口（芝浦口）徒歩5分
- 都営地下鉄浅草線「三田駅」A7出口 三田線「三田駅」A9出口 徒歩7分
- ちいばす ◆芝ルート・芝浦港南ルート「みなとパーク芝浦」徒歩0分
◆芝浦港南ルート「芝浦一丁目」徒歩4分
- 都営バス（田92・99）「田町駅東口」徒歩6分



港区男女平等参画情報誌「OASIS オアシス」78号 2023年9月発行

発行：港区立男女平等参画センター 指定管理者 株式会社明日葉